
ミニ物語～ミドリ＋ミドリ～

凧夜 流歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミニ物語（ミドリ＋ミドリ）

【Nコード】

N5241K

【作者名】

風夜 流歌

【あらすじ】

・！
高松高校に転入してきた夏目 翠だが、初日から遅刻しちゃう・・
走っている翠とぶつかったのは同じ年の男の子で・・・。
恋愛・・・だと思います！

1、ミドリ十出逢い

夏目^{なつめ} 翠^{みどり}は高松高校への道を走っていた。
茶色く長い髪の毛がバラバラと乱れている事などとうに気にしていない。

「転入早々遅刻だなんてしゃれになんないわよ!？」

あそこの十字路を通り過ぎると学校はすぐだ。

もつれそうになる足を懸命に動かして十字路の角にさしかかった時。
ドン!

「キャアッ」

翠は何かとぶつかってしりもちをついてしまった。

「痛ったあ・・・何?こんな所にカベ・・・?」

ぼやきながら前を見た翠の目に映ったのは同い年くらいの男の子の姿。

翠と同じ茶髪で顔も整っている。

(・・・かっこいい)

瞬間に痛みも忘れそう思ってしまった。

「・・・大丈夫か?」

いつまでたってもぼうっと座り込んでいる翠に痺れを切らしたのか、
その男の子が翠の顔を覗き込んで聞いてきた。

「え・・・あ、はい!」

当の翠は男の子に見とれていたために、いきなり話しかけられ、し
どろもどろになりながらなんとか返事をした。

「そ・・・んじゃ」

翠の返事を聞くやいなや男の子はスタスタと歩いて行ってしまった。

「・・・え」

普通は謝るとか助け起こすとかしない・・・?

「・・・礼儀というものを知らないの?」

自分も謝っていない事に気付くことなく、ブツブツ呟きながら立ち

上がって制服に着いた砂をはらった時に気づいた。

「あ、遅刻する」

その言葉を待っていたかのように学校のチャイムが響いた。

「おゝいてめえら席着け」

先生の一声で騒々しかった生徒達が席に着いた。

「知ってるやつもいるだろうが、今日からクラスメートが一人増える」

入って来いという言葉を含図に廊下で待っていた翠は教室に足を踏み入れた。

黒板に翠の名前を書いている先生からぐると教室の中を見渡す。

「・・・あ」

窓側の一番奥の席に座る人物を見て小さく声を漏らしてしまった。

（今朝、ぶつかって謝りもしなかった男の子だ）

男の子は転入生に興味が無いのか、窓の外を眺めていてこちらを見ようともしない。

「夏目 翠さんだ。元はあの有名な水島高校に通っていたらしい。」

・・夏目、お前の席はあそこな」

言いながら先生が指したのはあの男の子の隣の席。

「河合、夏目がわからないことがあったら教えてやれよ」
かわい

その言葉を聞いて、河合という男の子はチラッとこっちを見たかと思うと、ため息をつきながら窓の外に向き直してしまった。

1、ミドリ十出逢い（後書き）

恋愛？小説は初めて書きます＞＜
甘々なのは苦手なのでちょい甘？を目指したいと思います^^

2、ミドリ十みどり

「あの、今朝はごめんなさい。急いでたから・・・」

指定された席に着いた翠は取りあえず話す口実として謝ってみた。

「・・・別に」

河合は返事すらしたが相変わらず窓の外から目を離さない。

「えっと・・・私夏目 翠っていうの」

「さっき聞いた」

聞いていたんだ。

少し感心しながら、よろしくと続けた。

即答で返された投げやりな言葉使いはあえて触れない。

「河合くん・・・だったよね？下の名前なんていうの？」

「・・・キミに言う義務は無い」

「・・・」

・・・なに・・・こいつ・・・無性に腹が立つんだけど・・・。

「教えてくれても良いじゃない・・・？」

低い声で言ったその言葉に呆れ顔でやっところちを見た河合はため息をつきながら答えた。

「・・・ミドリだよ河合 碧」

ミドリ・・・読み方一緒じゃない・・・！

「へえ、男の子でもミドリって名前有るんだ」

クスクスと笑いをこぼしながら言った翠だったが碧の睨みをきかせた視線で笑うのを止めた。

「・・・普通初対面の子に睨む？」

「二度目だろう・・・？」

「・・・」

今度は碧が冷笑しながら言った。

間違っていないから言い返せない・・・けど・・・こいつ・・・ムカつく・・・！

また窓の外へ顔を向けてしまった碧を睨みながら心の中で呟いた。

昼休みに入った。

河合 碧はチャイムが鳴ると共に姿を消している。

「始めまして夏目さん！」

元気良く話しかけてきたのはクラスメートの女の子二人。

二人は心底感心したように話しかけてきた。

「スゴいね夏目さん！あの河合くんと会話するなんて！」

「え」

「ホント！あの河合くんが会話するなんて・・・！夏目さん河合くんと何かあったの！？」

「えっと・・・？」

『あの』って・・・何？

二人の会話を聞いてかクラスメート達が翠のまわりに集まりだした。

「ホント。俺なんか返事してくれたこともないぜ」

「いつもだんまりで何考えてんのかわかんないもんねえ」

「そこが良いんじゃない！頭も良いし運動神経もバツグンだし！」

「それを言うならB組の双葉君だって・・・」

「あとは双葉みたいに人と楽しく話すということ覚えてくれりやあな・・・」

「そうだよな。表情もいつも一緒にちよつと怖わいし」

（河合くんって・・・ぶっきらぼうなのかな？）

周りの人達の会話を聞きながらなんとなくそう思った。

3、ミドリ十あおい

昼休みが終わり五、六時間目が終わり、掃除が終わり。

高松高校での初登校はあと十分もすれば終わる。

（隣はあれだけど結構楽しそうなトコで良かった）

先生の話も終って帰る準備をしていた翠は碧が廊下に立っていることに気づいた。

「？」

何となく気になった翠はカバンを抱え早足で碧の元へ向かった。

「何してんの？」

「・・・別に」

流石に驚いたらしい碧がこちらに振り返って多少戸惑いながら答えた。

相変わらずの答えに翠が思わずため息をもらした時、背中側から声が聞こえた。

「みーどり！」

ふいに名前を呼ばれ、驚いて振り向いた先に、テンパで黒髪の男の子がこちらへ向かって歩いてきている。

（だれ！？）

「キミじゃない・・・俺だよ」

翠の考えを見透かしたように碧が呟いた。

「わりい、先生から呼び出しくらっちゃって・・・その子だれ？」

「転入生」

男の子の問いに碧がどうでも良いとばかりに答えれば、それを聞いて男の子は珍しいものを見るようにまじまじと翠を見てきた。

「へえ・・・君が噂の転入生・・・」

「?・・・えっと・・・夏目 翠デス」

『噂の』というのが多少気になるがとりあえず自己紹介をした。

「翠ちゃんね。よろしく！俺そいつのダチの双葉 葵っての」

そいつ、と指を指された碧は鬱陶しそうに指を払いのけた。

「葵、呼び出しくらったんだろ。いつ終わるんだ？」

「ちょっと話すだけだからすぐ終わると思う」

「そ、んじゃ下いるから早くしろよ」

言うや否や碧はスタスタと階段を下りていった。

「・・・翠ちゃん、家どこ？」

碧の姿が見えなくなると葵が遠慮がちに話しかけてきた。

「南町の方」

「お！近いね、今日一緒帰らない？・・・碧もいるけど・・・」
「・・・え」

会って十分やそこらで女の子を誘うか？普通・・・。

「今日一人なんだろう？最近はずくなるの早いから危ないかなって思
ったんだけど・・・」

翠の意図を察してか葵が慌てて理由を言った。

なるほど・・・。この人は碧とは違ってとても優しい人だ！

「うん、良いよ。一緒に帰ろ」

その返事を聞いて葵はにっこりと微笑むと、下で待っててと告げ教室に入ってしまった。

4、ミドリ十帰り道

「・・・というわけで一緒に帰ることになったんだけど・・・」
「・・・」

上での詳細を言い終わる頃には碧の顔はあからさまに嫌そうに歪んでいた。

そこまで嫌そうにしくても・・・。

「何・・・その顔・・・」

「・・・別に・・・決まった事なら仕方ないか」

碧はそう言っと思いきりため息を付いた。

・・・何・・・その言い方・・・！

ムカツクー！！

「お待たせ・・・どうしたんだよ二人とも」

用事を終えて翠達の元へ来たときに葵が見たのは翠を包む目に見えるほどの険悪なムード。

「別に、何も」

「・・・」

碧はさらっとごく普通に答えたが翠は納得がいかないという風に目の前の人物を見ていた。

「用事は終わったんだろ？帰ってやることがあるんだ」

「わかった。急ごうか」

ニコニコと翠の元へやって来た葵は小さい声で話しかけた。

「ごめんね翠ちゃん。あいつちよっと口下手なんだ・・・でも根は良い奴なんだよ」

根は良い・・・本当だろうか。

そんな疑問を抱きながら、先に学校を出ていた碧を追って翠と葵は学校を後にした。

「そうだ翠ちゃん。俺これから君のこと『ナツミ』って呼ぶことにしたから」

無言が続く学校からの帰り道、葵がいきなり切り出した。

「へ・・・？なんで？」

「ほら、ミドリだと碧とかぶってややこしいだろう？」

「でも、何でナツミ？」

「名前、夏目 翠だろ？名字の『なつ』と名前の『み』を取って『ナツミ』」

「・・・ナルホド」

お好きにどおぞ、と返すとありがと、と帰ってきた。爽やかな笑顔付きだ。

何故か顔が熱くなって葵から目をそらした。

目をそらした先に碧が移る。

何ともおもしろくなさそうな顔をしている。

やっぱり私嫌われてるのかな？

そんな事を考えていると、突然二人が立ち止まった。

「え？」

「じゃね、ナツミちゃん俺、家こっちだから。また明日ね！」

と葵は手を振りながら真横の道へ入っていった。

「・・・・・・え・・・」

ええええ！！？

こんなに早くいなくなるとは聞いてないよ！？

・・・葵がいなくなった、ということは・・・。

「なにしてる。行くぞ」

いつまでも横道を見つめている翠に不機嫌そうな声がかかった。

翠は碧に気付かれないようにため息を付いた。

5、ミドリ十となり

「・・・ねえ、みど・・・河合君は家の方向こっちなのか？」

「・・・なんで？」

ホントに意外な質問だったのか、碧は少し驚いているように見える。

「だって朝、別の方向から来たじゃない」

だからぶつかったのに、と翠は少しぶすくれて言った。

「ああ、そのこと。あれは朝、早く出過ぎて遠回りをしてたんだよ」

「・・・へえ」

心底どうでも良いというような碧に翠は少しムツとしたが、そこはひとまず置いておいた。

もうすぐ家に着く。

良かった、やっとこの緊迫した空気から逃れられる。

「あ、私ここで良いから」

翠は碧に早々と告げるとそそくさと家へと足を向けた。

「・・・家、ここなのか・・・？」

碧が意外そうな声を出した。

「・・・うん」

それがどうしたというのだろうか。

翠の家は普通の二階立ての一軒家。

さして驚く理由など無いはずだが・・・。

「・・・いや、いい。じゃ」

そう言って碧は背を向けて帰って行ってしまった。

「・・・何だというのよ・・・」

翠はぶつくさと文句を言いながら家へと入っていった。

翠の親は共働きで、帰ってくるのが深夜になることもある。

翠は、一人で夕飯を済ませ部屋に籠もっていた。

「ヒマだなあ」

寝ようかな。と電気を消すと、窓から光が射し込んできた。

「・・・なんだろう」

カーテンを開けると隣の家の窓からの光だと言うことがわかった。

隣、誰かいるんだ・・・。

隣の窓はスリガラスのうえにカーテンがかかっているので中は見えない。

引っ越してきた日。親たちは近所に挨拶をしに行っていたが、自分
は行ってないので誰がいるのかわからない。

いつかわかるだろうと思って、カーテンを閉めようとカーテンに手
をかけたとき、向こうの窓の方から小さな音がしたかと思うと、い
きなり向かいの窓が開いた。

「・・・！！？」

窓から顔を出したのは、さっき別れたばかりの河合 碧だった。

5、シドリ十となり(後書き)

先は長い・・・どこに向かおうとしてるんだろう・・・？

6、ミドリ十ももか

「な、なんで・・・河合が・・・」
ふるふると震える指で指しながら翠は目の前の人物に言った。

「・・・・・・・・！」

しばらく目を見開いて驚いていた碧は、いきなりハツとしたように窓を思いっきり閉めた。

「・・・・・・・・え」

あとに残されたのは翠一人。

「ち、ちよっと・・・！河合 碧！説明しなさい！！」
街中に翠の叫び声が響いた。

翠と碧はお互いに窓から顔を出し苦い顔をしながら向き合っていた。

「・・・・・・・・で？」

「・・・・・・・・で？って言われても」

困るんだが。と碧は座った目で答えた。

「なんであんたそこにいんの？」

「なんでって・・・・・・・・ここ俺の家だし・・・・。ここ俺の部屋だから、
だろ？」

最悪だ。

よりにもよってコイツが隣の家だなんて・・・・！
しかも向いの部屋・・・・。

「今、あからさまに最悪だって顔しただろ」

眉間にシワを寄せっぱなしの碧に簡単に読まれた。

「だ、だってあんたさっき私と別れて帰るとき別の方向に向かって
行ってたじゃない・・・・・・・・！」

「ああ、それは・・・・」

「どうしたの？お兄ちゃん」

翠の質問に答えようとした碧の言葉をかわいらしい声がさえぎった。声の出元に同時に振り返った二人の目に飛び込んできたのは5、6歳の女の子。

「妹の桃香だ。さっきはこいつの迎えに行ってたんだ。・・・桃香。お兄ちゃんの手の中に入るときはノックをしろっていつも言ってるだろう」

前半は翠に、後半は桃香という女の子に言った碧は桃香を促して翠の前に出させた。

「ほら。隣に引っ越してきたおねえちゃんだ。ご挨拶は？」

「河合 桃香です。今年で6歳です」

よろしく、と愛らしい笑顔を向けられるといやでも笑顔になれる。

「こちらこそよろしく。私は、夏目 翠よ」

にこっと微笑みながらこちらも挨拶をした。

「おねえちゃんもミドリなの？お兄ちゃんと一緒だね！」

目を輝かせながら言う桃香に半ば困った様子で碧が微笑みかけた。

「・・・桃、そろそろ部屋に戻って寝る準備してきな」

「えー！やだあ！桃香まだおねえちゃんとお話するの！」

「ほら、このおねえちゃんも今から寝るみたいだからお話は出来ないよ。また明日な」

ぽんぽんと頭を軽く撫でて、碧は洩る桃香を部屋の外に出した。

「・・・妹には甘いのね」

ドアを閉めて戻って来た碧に翠はクスクスと笑いかける。

「どうでもいいだろ。あいつもまだ甘えたい盛りなんだ。俺にぐらい甘えさせてやらないと可哀相だろ」

「・・・え」

「じゃあ。俺ももう寝る。・・・葵のやつお前のこと気に入ったみたいだから学校では気をつけておけ」

「え、それという・・・」

翠の質問を聞くことなく碧の部屋の窓は閉められた。

6、ミドリ十ももか（後書き）

久々に投稿。妹に甘い兄、好きですよWWWさて、この後どうなるのやら・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5241k/>

ミニ物語～ミドリ+ミドリ～

2010年10月24日09時45分発行